

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

A

M

B

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

鑄 鐘

日本歳時記

春







日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤





民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡亶艱考索嘗屬家姪好古命編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎子暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨



聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註  
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改  
而正之則幸甚

貞享丁卯魁秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本書紀凡例

一此編をわらむるや一多ら之をいふに  
冬つと春とくとも事三百の句は凡の  
亥雜事とも信く一の文よおむるとい  
國は又まよわつとも又家國の事とい  
る一とげんよとていひて書はまゆる  
いりる氣とを徹よふさんとまわらず  
まわつとも事一ともさき後高りのこ  
るを民間代版乃男城の女よ案時れ事  
宜とまわつていためよとるもの



一 案付の在りしを御中と申すこと一乃徳書紙  
 考へ乞と申す也と繕くまじし御書  
 考申すこと一乃徳書紙と申すこと一乃徳書紙  
 世儀れ事とも申すこと一乃徳書紙

一月く乃事官を民生日用一役ありた  
 書にのひる所存紙なりと傳れとまじく  
 これと志願さばらざりしと申すこと一乃徳書紙  
 好く一覽ありしと申すこと一乃徳書紙  
 本邦乃民儀と申すこと一乃徳書紙  
 事の一と申すこと一乃徳書紙

一 案付より一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙  
 乃世儀れと申すこと一乃徳書紙

一 御延年中乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事  
 乃御紀法を延壽式に申す事



書よほまじくあり 申視の在るよさら  
 けいあらん人をこれと考知し今これ  
 とちかさは整えさるべし 長あやあつと  
 けい心もかゝるべし くれいもしし付  
 りぬい戸 是かしの儀或もあまうり志り  
 是とも今民のよけいり衆多の事よ  
 申つあつとけいりて略るれうと志る  
 ぬこれをもかゝと志るしめりたあまう  
 一は梅と集録せんうと叔父換折るうの事  
 予よ命をりあられをも予をいふりすけい

かく機軸しこれに柱探れうしつまとい  
 うりてたまよわぬいともその世を再こ  
 おさるあまういぬいともいひげさるる  
 の屋海の文をともいぬいて書つて百年  
 を種くぬいれぬいと終りぬい又看り  
 冊福とえきけいぬいよ金書やなまうし志る  
 あれぬ機軸をさうけいをもむやあぬたあ  
 しわきけいひぐくしきあもすのの  
 ずあやうあいふもきしめけいぬいぬい  
 のたえよせけいもいふあかへり信えぬ







と初め勃はつと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 有り又其の湯ゆの初はつと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 湯ゆと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 素そ問もんよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 可か物ぶつ以もつて常じょうに於おけり外ほかに於おけり起おこる處ところは廣ひろく亦また一いつ悠ゆう々々  
 被おほふ形かたちと緩ゆるくして志こころと生なまむと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 肝かんと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 道みちと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる

一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 久くしと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 全ぜん医い藥やく驗けんよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 肝かんの臟ぞうよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 と一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 平へい全ぜん方ほうふと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 全ぜん醫い藥やく驗けんよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 肝かんの臟ぞうよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 月つき令しやう令しやう廣くわう義ぎよと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる  
 飲いん食じやくべりべりと一いつ悠ゆう々々として定さだむる時ときと失うしはる



漱一々久く又獲物とくくい衣袋とわ  
りりきりきりと焚きぐり

おはせ痛よつく春乃方毎朝此の様より一二百粒

りりきりきり又秋抄の時よりりりきり獲湯は後一

掃入膳乃下及足と此を抄より一風毒脚

きりとのりきりきり

おはせ痛よつく春乃方毎朝此の様より一二百粒

りりきりきり又秋抄の時よりりりきり獲湯は後一

掃入膳乃下及足と此を抄より一風毒脚

きりとのりきりきり

正月

正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く  
正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く

正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く  
正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く

正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く  
正月は正月の首の事なり正月の中○備後大守の書に曰く

元日舞典の事く月元日舞典干支祀慈沈の原は月元日

正月也元日ハ初日也と記せりきりきり唐虞乃河洗

元日乃名なり又世日と云元日乃源書よ聖人考暦

数ハ正元としんえり案の元時乃元日ハ元日ハ

元元やりきり玉照堂典よきりきり今乃世りきり

元元と称して元元と稱して後漢代祀堂り傳ふきり

案乃始月の始日ハ始りきり元元と稱して後漢代祀堂り傳ふきり







乳終く喜盤とむじ

和國乃風俗して盤とふ松竹藪場を以て作  
 てす又桑柘漚藻海蝦とらん也一とむじか  
 粘粉を以てはくを移くこれとむじ穀初と  
 來り雲霧を以て氣とむじとむじと喜葉といふ  
 蓬葉ハ他を以てむじハくれを以てむじハく  
 りらく一は色喜葉生葉本あくと盤といはむ  
 喜盤く名付くむじハくむじハくむじハく  
 後よりくむじハくむじハくむじハくむじハく  
 喜盤細生葉といはむむじハくむじハくむじハく  
 周知より風上化

まは上楚人五年盤とよむむじと志くむじハく

やりの喜くむじハくむじハく

食肉よりむじハく雑菜と祖考考妣の墓前より  
 酒と献すむじハくむじハく今日孫湯礼  
 あり供する人も志盤礼ありていふむじハく  
 祭りのむじハくむじハくむじハくむじハく  
 けいもく可なり楊氏後を除む月あこむ日あこ  
 とむじハくむじハくむじハくむじハく  
 るあつ祖考考妣の墓前より酒とむじハく  
 雑菜と食し居種肉と作く飯と喫し酒と



乃又手洗以すかぐ

あつこく製し一まてら寝ようんお打何のひ葉

海菜牛蒡芽菜粉菜すりの花菖蒲いも

えりよりのあめたて用りまう延取まらぬ君と

去昨日紀工をいりあめんうまをなすうま

若くは葉いも食小俵よこれと名付て雑煮と

いよ我 國の風伝きく収りふ事古傳と

他のもく収ふ此日より三日よりすま 寝さす

とむのをもまきと収ふとたくりしをえんてあ

元日は膠牙湯とくふるり荆せ菜時記のを

まきあれ日まの併とくむり事 月令慶義よ

ろえりり又居種酒とのしと菜時記よつら

むり人何りて菜時記の月よあ毎菜時又

黒岡の菜一貼とわりの袋小令く井中し

後二め元日は水よりあましく酒移よ入名

付く居種酒と号次合あられとのあは痘疫

とやまはとわり居るやうとくを種いよま

つくと破すは菜く邪動と居絶く人魂と

種時せしむらあは居種く名付て酒種都を

にんえりり妻時称の改ふは種い懸鬼り名

此菜く厄爽と居割とくり又は時菜あ



居種を孫思邈が居た名も志りせり我  
 祖少く居種は教とすむらりる居種香  
 乃沛亨弘仁年中よりしりしやちん  
 元日ふい居種教と稱ひ二日ふい教と稱ひ  
 三日ふい教後教を用りしり又幼きその名  
 兼とゆれはたてりて居種との名を記しり人  
 衆を失えは後く居種とりむいし事  
 時後教書よりえり後漢の孝廉杜蜜は  
 わりておれり居種に教を授けり  
 獄中少く元日よあひゆと飲くし居種  
 正旦

後小起これとてさくさく居種は  
 前り東坡く待し不稱最後は居種と作れり  
 又成文符々案且り符よ好気性前倫失矣  
 居種を毎ふは是膏もく居種は居種  
 居種少年これ衣りし居種とて居種り志るま  
 盧柳南く後ち正旦よ居種酒とのむ事必  
 早幼よりんむじ気子幼よ居種とて居種りなり  
 月正元日ハ一葉乃始あり長幼の分とて正旦  
 せすんばあろくは居種よ予り居種りなり  
 居種とて居種り居種り居種り居種り



あつえつり

○今朝夜よまのつらけん人さ色大玉餅と夫  
三命取の圖像とかねく板よ刻て紙よすりたる  
と抄けて人乃門戸とたけとくとと賣る福祿  
をのりさく冥者多一故歌よよとらる也

○と釣恙水さくのびるあり世後回春よつら  
あつやまおいらりら十二月の土用あま水  
月御生動の方乃井と封じて人は海せすまの  
日代よ早よ土瓶小入く女あつつきくもあつり  
ままの日は水と飲々年中乃移字と海くとあん

かあまるとまあひてわさくもせむの井花水と  
てくろくろあとのびるもつらくやまぬら  
夫よくあば恙水といふをねく

○又菫園とよひてしらわがまよびふ  
あよ後徳と掃す掃すは天の射野大合巻之十七條  
乃細のよつら麦来杉做成形を海入に海内城  
我園の歌鏡代形はゆくとんそり他人を菫とよひて  
命とらるあま菫といふままよつらひもよび也  
菫園はらひとらむらりありさつて西月の  
かろよびつら海をた今集よ入ら  
あまのやがみらふととあれらうのてら



らゆりあつちひせいでしりあふと備するにあ無後  
 元日ハ人々さけりされさへ延永の流の御付  
 全の國より大嘗會乃ひびきましくまつりし時  
 大伴代さきまけり奇なり  
以ハハ執也大嘗會乃  
時延紀に基れり  
 へりまにさりとてしり又もさきまけり積徳と語り  
 子供まにさくも歌とあへてあひまんとも  
 かみ乃もらぬゆかや

まるく一ふと元日ハ豊牙儀とくま事  
 豊國ハ義とさくし案時紀にまらせり  
 くとさく後仕方の人をまきまんとさく  
 ころ乃

國ハ大史官長に皇の朋友流さく初る年始れ  
 聖とのまへて又庶人ハるれ亦乃列を初らぶ  
 けく聖一とのなごらゆも聖とのまへて  
 むい月ハ知る人のをもといたくひなりかひて  
 けくむつひさくしむべくあまは月乃如名と  
 むつま一月とらさくしあもさるひがこころ  
 元日ハ朝賀ハ濃の宮祖より初るしり  
 杜氏通典ハ人々さけり我朝より西紀と實  
 との依神衣天皇代御時より始めり  
 しりまにさくしり



○今日枕に湯と服すまの百邪と辟と災厄は  
 みるゝり枕を寝ずとる枕あり又月令慶賀  
 一元旦巻木湯と服し衣を用く体活し或の  
 刻て焚之極と却寝と辟疫とやまたとて下り  
 寝寤り月令元旦梅乾酒と服すまの邪と却  
 せしとるせり月令慶賀小く元旦酒乾  
 日寝又辟邪といふ慶賀の節は正於辟  
 酒乾年也命蓋とゆきり

○十日より月令まきくつたは松竹と意は五福  
 とらりこのよは豊はゆづり葉慶賀とてかた

事あり世後回きよとらひけりむいりまき  
 海とてとく一歳り處居を封戸あるふと  
 民がとるゆれとじり一町のうらと又出  
 津よまらてつとせとて一六は乃門あり  
 ありこの中へ歳りる處とつらり侍ま六門なる  
 づまにあり候その門乃あま松竹とて侍り松を  
 ちとせとちとらり竹いよらりゆかばらあま  
 む年乃娘の寝るまよとて侍り一又豊は  
 見えい海とあわて雪を雪を志をせぬものか  
 れい志先程おかざりて知れども引侍りま

博桑  
 歳時記









博桑庵時言卷一

一四







一年乃天運と所向の風とて知るる此理也  
 これ妖氣よらうし候すべし此有るは又祥文記に  
 ○さうらうし小春今日桃符と改換する幸あり  
 年一桃木とて札とてうつらうつらとて  
 戸を掲ぐるれと年の始とふ換る有る縁起  
 桃換る符とて玉籾とて符も他はり山満経は  
 いと海中は爵星とあり山と桃木あり桃中  
 二符とて百鬼とて小春分元日桃符と候  
 やらんと風信通也とてしるを裁り山満経と  
 果ありとてしるは始あり乃候して候とてふ

せしむ桃とては多きは桃之為方木に  
 木の精止は木より味辛氣悪るは  
 厭彼中とあり乞とて刀に桃符とては  
 邪氣とてふとて我 國あり桃符と  
 うとてはつとてはとては神代乃むり  
 後多黄泉平好あり桃樹小立とては  
 二とありは日狭女とては赤良  
 軍時逃還地気桃を用とて鬼とては  
 一とありは記より見え侍り  
 家 國あり桃符とては事とては朱文書







あやふあきくまのふみせをいれ人乃るまよ  
く家のちふま〜那〜  
あつちをく〜そ〜  
をたけちをまよきり

元結が果且乃存り

一月今年始一奉新定潔潔百自交意

興一年同

玉女刑る元日の符よ

燧作新中一果漆表風子版入居種千門万戸  
勝る日。総把新柵換着新

宋着之り歳旦れ符り

居間無窓客早起但如帯挑板浴人櫻梅花漏  
兼香書風回笑語雪氣卜豊穰柏酒何勞執  
心康寿月長

○若小經史と業〜  
今日より〜  
之は〜一年乃金物と判ひんとあ〜一日を  
め〜

○世信よ今日終日屋中と掃塗せす乞新〜  
來る湯室と〜



五雜俎の厨代俗元日より又日まて費止と  
漆の輦に於て珍物より下石と名取  
室と名取といふこれ古人如然と實り  
を志るせり志るを名取といふも  
俗の事なり

○と夕帯の飯と炊く竈と煙と遊平

○今秋まぬの交と名取の壽命と換とる

月令廣義より

立春の正月の節あり大室の後中又日斗柄は指  
と名取といふ是は始建也元日の正月の日代始也

立春の正月の氣の始あり一年代天運是より  
たすまる時を是は始と名取なり  
餅を食し書餅と名取は桃湯は浴する事か  
也俗なり月令廣義より  
古今集より

神むらしてむらひの事やれると書る  
今よりやとる人 同集より  
雪のうらや書る事なり  
あまのうらやとる人 同集より



吾も女よとくふ氷代冠をこころにうらむるは  
 らふらふつらぬ 新古今集よ接政大臣大臣  
 みゆのしきもさるるはまて白雪の事りけ  
 けし小春のふたたり 同集より後成  
 きよしとくもさるるはまてもひきまを都よ  
 のこころひげりか

曹松り五言乃詩

玉燭傳佳節 湯和無此辰 土牛呈紫縵 綵燕  
 表年春 臘老星回次 芒竹月建寅 梅紀將  
 柳久傳思越鄉人

黃真林り五言の詩

五十年間 祇白濤 後來歲月 更茫茫 餘生未  
 度看新曆 又效喜風 減一年

張翥乃五言の詩

徘徊氷霰少 春到人間 草木知 俊骨眼  
 生 意濃 東風吹 水綠 羨

○喜甚乃何より 傍餅焦くくめくちくはむら  
 色もこのの黄雪ももろれ者れまよりて先ぐ  
 たりとらん黄雪乃まえさけり人のとらんめり  
 ち山申なるといふひははさるるす都ふいふく



ひも多し〜て園あるやと林ちりた水のあま  
かたざれとそそのあうきすへ〜悔よ〜るま  
なくとやまに杜松を又多し〜てあま  
あぐ〜是地氣乃かたれつあるあ〜

○年の始よ孝子の破魔弓とて射るの治り  
世を我と忘れざるさあ〜〜但む〜  
射礼とて正月は内裏あ〜る射る事乃あり  
〜あり孝徳天皇は御宇は内内〜正月は  
弓とて〜む〜事古き文も入る〜  
かほ〜と〜う〜く〜の年乃〜

年長せり人をらと射〜り〜や文藝通考  
日本乃部也毎正月一日必射教す記き  
○又球杖うらりあり是密丸り眼と〜  
とる後作れ〜た事の教説あり傳る〜

新昭神中抄十云十位深黄帝取密丸  
毬之今毬杖是也〜彼例淨土年始用件  
國中毬事源日本國字書例年始打  
毬杖云云毬事た〜りな〜す毬古き文也  
是之次附會の記あり〜  
○又あ〜る毬乃わ〜れあ〜たの〜して楽

博多府史記卷一

三十一



善子よ娘とつまきく松とてはくするあり世後四春  
 小いしく是地さぬるもの蚊よくられぬまじ  
 なるひるりたり秋乃らしくぬ不埒障といふ虫か来  
 てい蚊とらるるふおありあはぬこころいふ薬華  
 子をどとと人たうぬらありて抱とつけたり  
 これと松はいつさあぐまの落る何と人たうか  
 早れやうぬはく松とおうまうしりぬぬぬ  
 こころのこころはきゆるなり とんぼの蚊と念ふう  
 中葉あぐまのちうさう  
 ○又お奇業業といふ事正月はあむじう  
 正月十八日自月乃比方也二縮歌とくあ中の  
あはれやう

男女をうけとつてて肉衣中く秘洞といふ  
 て中らせうせうあり 中葉うもる乃代上正月十五日  
 ち毎ちく縮舞せうしりう潜夜  
難書あくとちも  
 志をせり 持統天皇の治時を漢人縮歌と奏せ  
 ころや史源氏乃物語れかうこのうされあり  
 さ酒もかろぬううみ事ううい梅風を吹ぬ  
 事よととらうと奇業業乃秘洞といふい  
 侍りたり臨舞乃舞人美春樂と奏せし  
 不い飛葉舞くと難ひあり 世後四春よ  
 みえたり 今を縮歌  
 ありま乃始ふ奇業業とてあはれいさうと  
 てこころい舞ありくありあまうういあああり



二日巳日と狗日と云々々々方報く占書より一月一日  
 と雜と一一日と狗と一三日と猪と一四日と羊  
 と一五日と牛と一六日と馬と一七日と人  
 八日と穀とすその日晴る時を生むる事れもの  
 所之くより時ハ更なりと云々々々を云々々々  
 生他自然乃妙理ありかゝる事言として天  
 乃大なる運と推するハ事言として海と云々々々  
 此へ入候よわく事場あり事ありと云々々々  
 今始元日と云々々々不法時と云々々々信  
 とかりと云々々々乃何事方授乱して人物たよ

吾せうあくる日ハ  
 ○今朝卯乃刻より起念時よりりて雜糞と云々  
 冷酒とのむと晩粥乃ごご一又温飯と云々  
 温酒乃び一云々の事言乃事言乃事言  
 所あり今日明日何く事言  
 ○今日戌家一を馬事初わりこれと云々初と云々  
 又子初と云々又弓射初鉄砲打初わり農家  
 事言と云々初何り高家一云々の事言ひ初と云々  
 人々初と云々  
 ○世俗と云々新年事言一男よ云々水と云々

...

...



あり乞へ永祿の比阿波の三好の家臣松永道高  
 う姪女と我家乃孫屋又妻あてせしは出獄  
 と所初一ころや年つる紫血氣の盛るるま  
 まうせくばいたる如きとなし勇とそとるひ病  
 とせしむを口御關軍より及ふり何り後中  
 酒食と密にせ碎他して乳より子弟れ寄  
 乞考のりやしき職とる出うす又見せ又  
 これと林のへー

三月今約飲食とらるる又明日の志し一元旦  
 として自らよもすして難業と食し一屋を種肉と

のむ奴婢を又去り

五日采地ある人といは領内乃農人多く有る  
 必飯饗肉と与ふ一一年の初れ密に家  
 有ふ分は酒と美饗と与ふ一農の毛野民の  
 申たりるれ穠穡乃功ふたりて勇とや  
 なる事なれ早賦ありとくおるさふす  
 らは是采地となすの事と統し是去年れ  
 農功ふむくゆらさるり又道路に旅人多  
 なる年乃急なりと古人もさる

六日沐浴



七日人日ヒトノヒといふヒトノヒ又ヒトノヒ盡ヒトノヒ辰ヒトノヒともいふ人ヒトノヒ乃ヒトノヒ盡ヒトノヒ方ヒトノヒをいひぬくヒトノヒやヒトノヒ初ヒトノヒ倍ヒトノヒよりヒトノヒみヒトノヒの初ヒトノヒより今日七ヒトノヒ枝ヒトノヒの菜ヒトノヒ粥ヒトノヒとヒトノヒ粥ヒトノヒ食ヒトノヒふ七ヒトノヒ枝ヒトノヒ菜ヒトノヒといふヒトノヒ并ヒトノヒよヒトノヒ

せりたづみヒトノヒたつてヒトノヒ佛ヒトノヒ乃ヒトノヒ性ヒトノヒとヒトノヒれす  
ちりこれろヒトノヒ七ヒトノヒ枝ヒトノヒ菜ヒトノヒ  
又佛申言・難言かしくもなればく佛の性  
よは佛よりかたけはかといふのありすれは性よりかたけといふは必ずみく  
くはけかみ業をいひぬくよりありのありては業業と云々著しと一類二  
地あり世人多きは性とちり  
申言は佛の性と業とを別す  
正月ヒトノヒとヒトノヒのヒトノヒ乃ヒトノヒ日ヒトノヒ菜ヒトノヒ七ヒトノヒ枝ヒトノヒと  
ちり事ヒトノヒ多ヒトノヒ天ヒトノヒ皇ヒトノヒ代ヒトノヒ御ヒトノヒ言ヒトノヒよりヒトノヒとヒトノヒまヒトノヒんヒトノヒくヒトノヒやヒトノヒまヒトノヒく  
延ヒトノヒ喜ヒトノヒ十ヒトノヒ一ヒトノヒ年ヒトノヒ正月ヒトノヒ七日ヒトノヒ後ヒトノヒ院ヒトノヒより七ヒトノヒ枝ヒトノヒの菜ヒトノヒと

佛ヒトノヒともいふヒトノヒりヒトノヒ荊ヒトノヒ楚ヒトノヒ宋ヒトノヒ固ヒトノヒ死ヒトノヒ也ヒトノヒ正月ヒトノヒ七日ヒトノヒ七ヒトノヒ枝ヒトノヒ菜ヒトノヒと  
いふヒトノヒ美ヒトノヒしヒトノヒこれヒトノヒとヒトノヒくヒトノヒかヒトノヒとヒトノヒりヒトノヒ  
是れ日食は菜不  
可と云ふは延喜之

○又ヒトノヒげヒトノヒ日ヒトノヒ岳ヒトノヒよりヒトノヒ中ヒトノヒむヒトノヒとヒトノヒをヒトノヒくヒトノヒ回ヒトノヒ分ヒトノヒとヒトノヒをヒトノヒめヒトノヒはヒトノヒ海ヒトノヒ陽ヒトノヒのヒトノヒ氣ヒトノヒ  
とヒトノヒ初ヒトノヒりヒトノヒ事ヒトノヒとヒトノヒいヒトノヒくヒトノヒ燧ヒトノヒ火ヒトノヒとヒトノヒ降ヒトノヒくヒトノヒ乃ヒトノヒ御ヒトノヒありヒトノヒとヒトノヒ綿ヒトノヒ繡ヒトノヒ  
糸ヒトノヒ花ヒトノヒ管ヒトノヒよヒトノヒとヒトノヒえヒトノヒりヒトノヒ妻ヒトノヒをヒトノヒえヒトノヒりヒトノヒ人ヒトノヒ日ヒトノヒれヒトノヒ初ヒトノヒよりヒトノヒとヒトノヒくヒトノヒ命ヒトノヒ也ヒトノヒ  
升ヒトノヒ高ヒトノヒ山ヒトノヒ寓ヒトノヒ目ヒトノヒ脚ヒトノヒ厚ヒトノヒ映ヒトノヒ

○世ヒトノヒ後ヒトノヒのヒトノヒ事ヒトノヒよヒトノヒとヒトノヒくヒトノヒ今日ヒトノヒおヒトノヒちヒトノヒやヒトノヒけヒトノヒてヒトノヒはヒトノヒさヒトノヒとヒトノヒりヒトノヒ  
まヒトノヒあヒトノヒりヒトノヒはヒトノヒいヒトノヒとヒトノヒくヒトノヒとヒトノヒ馬ヒトノヒ乃ヒトノヒ性ヒトノヒのヒトノヒちヒトノヒとヒトノヒはヒトノヒ天ヒトノヒよりヒトノヒとヒトノヒりヒトノヒ  
地ヒトノヒ小ヒトノヒいヒトノヒとヒトノヒりヒトノヒ又ヒトノヒ天ヒトノヒれヒトノヒ脚ヒトノヒをヒトノヒ踏ヒトノヒちヒトノヒりヒトノヒ地ヒトノヒのヒトノヒ月ヒトノヒはヒトノヒちヒトノヒなり



とふふ又あり又礼記と書と東都ふむて書  
 七足とりしめと足えゆり又書と書と書と書  
 侍りい湯乃我介り書い書れ書い書い書い書  
 書い書い書い書い書い書い書い書い書い書  
 ひくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 書い書い書い書い書い書い書い書い書い書  
 書い書い書い書い書い書い書い書い書い書  
 書い書い書い書い書い書い書い書い書い書

通りの人日寄二杜二格遠近

人日越宿寄草堂遥懐友人思故郷柳條弄色  
 石思更梅記波枝堪測勝牙在幸満所心

猿百受夜千慮今年人日定お思明年人日知何又  
 一臥東山二千春生知書劍典風塵沈沈遂去二  
 千石愧爾在知南水人

○又由約いあへ乃信よ正月之れ子の日移よあき  
 山松と引くゆりありあきんりあき

子虎日と信登よよあきんりあきんりあき  
 信小

あきんりあきんりあきんりあきんりあきんりあき  
 け小松を雲雲あきんりあきんりあきんりあき  
 少年とゆり樹をよよあきんりあきんりあきんりあき



少くもなれけりありし一掃たるは蒸飭谷門の業  
者なり枝葉七女二心為業飲之と侍らばりあり  
し一掃たるは事乃侍らりしなり

八日俗醫業初の業師佛は後徳とくあり今日その  
服とつらして宴と設く又毎月八日業師佛乃  
に免不素儀と食すりものありこれ後唐氏に  
従よますといあやまりし業師佛と醫乃徳徳と  
あきあきなりしむし一掃農くしむし醫業と設  
けし今世は俗の醫術を徳免の業歴代を醫乃  
徳一掃たるは徳と徳ぬを徳農氏しし徳又醫乃徳

徳少くありしはまのされし徳徳乃徳徳と徳とく  
らんしむし徳一掃徳を素儀と徳とくありあり  
徳徳と徳人ありしなり 徳徳と徳徳と徳徳と  
徳徳命醫業と徳徳と徳徳と徳徳と徳徳と  
徳 國代醫乃徳と徳徳と徳徳と徳徳と徳徳と  
徳徳と徳一掃ありし徳徳乃中より徳徳と徳  
徳徳乃徳徳と徳徳と徳徳と徳徳と徳徳と徳徳と  
つり八日正に素食とありし徳徳と徳徳と徳徳と  
まの徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と  
徳一掃たるは徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と徳と











